

II 施肥基準

1 水稻

地域慣行基準

【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	主 な 該 当 地 域
黒ボク土	11	上下伊那台地、松筑、木曾の一部、八ヶ岳山麓、浅間山山麓、飯綱黒姫山麓
非黒ボク土 れき質	11	上下伊那天竜沿岸、佐久上小千曲川沿岸、北安曇北部、南安曇郡、松筑、木曾の一部
上記以外の地域 細～粗粒質 湿田地帯	9	

※①麦二毛作遅植地域（非黒ボク土細粒質）にあつては、上記にかかわらず窒素成分量8kg/10aを地域慣行基準とする。

②前年秋に稲わら等の腐熟促進のため、石灰窒素などの窒素を含有する肥料を施用した場合は、窒素成分で4kg/10aを上限に、施用した窒素成分を地域慣行基準に加えることとする。

③地域の詳細は、長野県主要穀類等指導指標の地域別施肥基準を参照する。

(1) 特徴及び吸収特性

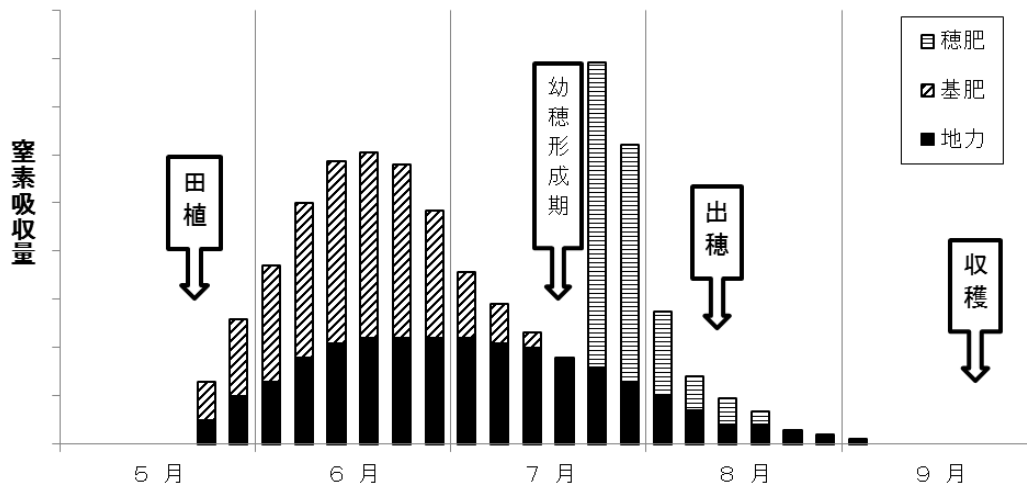


図 水稻の窒素吸収の特長（5月下旬植えコシヒカリを想定した模式図）

一般的に水稻は、地力由来、基肥由来、穂肥由来の窒素を吸収する。**吸収量の内訳は、地力由来が40～50%程度、肥料由来が50～60%程度**であり、土づくり等により地力が高い圃場では地力由来の割合が増加する。また、水稻の生育量（根量）は時間とともに増加するため、**基肥より穂肥の方が効率的に吸収される**。

地力窒素の吸収は地温の上昇とともに徐々に増加し、土壌により多少異なるが、月にピークを迎え、その後徐々に減少して成熟期を迎える。**基肥の吸収は水稻の生育とともに増加し、7月に入るとほぼ終了**する。穂肥の吸収は品種により施肥

適期が多少異なるが、7月下旬に施肥されると、水稻の吸肥能力が高くなっているため、**1～2週間程度で吸収する窒素の大部分が吸収**される。

(2) 肥培管理 (追肥)

表 幼穂発育段階の区分と追肥の効果

	発育段階の区分	葉齢指数	幼穂長	幼耳間長	出穂前日数	追肥の効果
幼穂形成期	1 穂首分化期	76~78			-32	穂数、一穂粒数は増加するが、下位節間が伸長して倒伏・生育遅延等による登熟歩合の低下を伴う。
	2 枝梗分化期					
	a 一次枝梗分化期	81~84			-30	
	b 二次枝梗分化期	85~86	0.5~1mm		-28	
	3 穎花分化期					一穂粒数の確保と有効茎歩合の向上に有効である。
	a 穎花分化始期	87	1~2mm		-25	
b 穎花分化中期	88~90	2~3mm		-20		
c 穎花分化後期	92	8mm		-19		
穂ばらみ期	4 花粉母細胞分化期 (減数分裂準備期)	95	8mm~1cm		-18	籾殻の肥大 (玄米千粒重の増加) と登熟歩合の向上に有効である。ただし、単位面積当たりの粒数増は期待できない。
	5 減数分裂期					
	a 減数分裂始期	97	5cm	-10cm	-15	
	b 減数分裂中期	98	15cm	0cm	-10	
	c 減数分裂後期		20cm	+10cm	-5	
6 花粉形成開始期	100	全長に近づく	+10~+12cm		稲体窒素含量が低い場合には登熟歩合が向上する。しかし、玄米窒素(タンパク)含量を高め食味を低下させる。	
7 花粉完成期	100	全長に達する				

水稻は、**7月上中旬の窒素の吸収量が多すぎると、この時期は水稻の下位節間(上から4~6節)の伸長時期のため挫折倒伏の原因**になりやすい。

穂肥は、その施用時期によって生育・収量構成要素(一穂粒数、登熟歩合、玄米千粒重)に及ぼす影響が異なるほか、米の品質・食味に対する影響が大きいため、栽培品種及び生育状況を考慮して適期に適量を施用する。表は幼穂発育段階において追肥の時期の違いが収量構成要素、節間伸長及び食味要因に及ぼす影響の概略を示したものである。穂肥施用にあたっては、これを参考にして、水稻の生育状況と照らし合わせて施肥時期、施用量の調整を行うことが必要である。